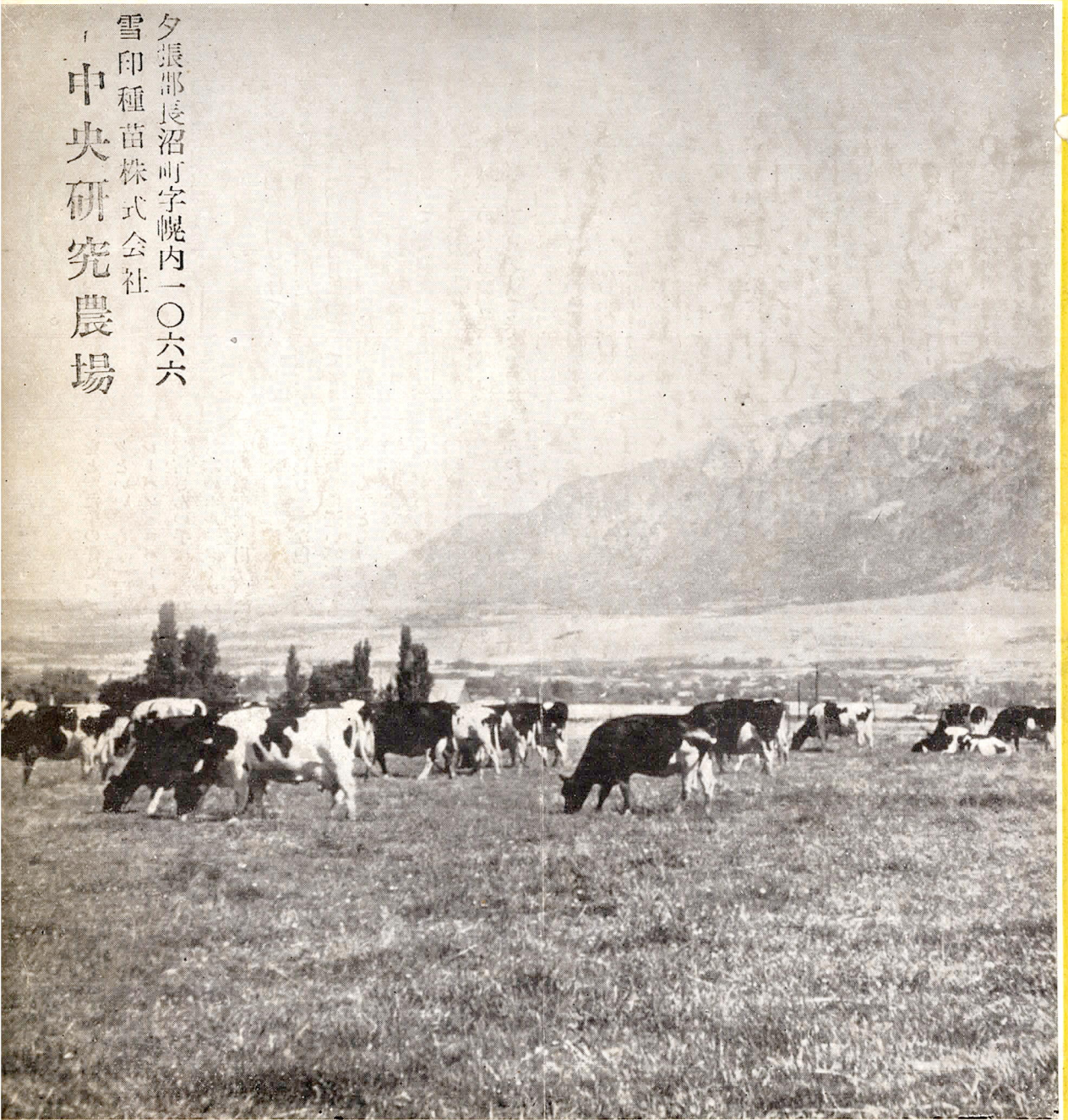


藝園草牧

第二卷・第三號
昭和二十九年三月一日(每月一回)發行

夕張部長沼町字幌内一〇六六
雪印種苗株式會社
中央研究農場

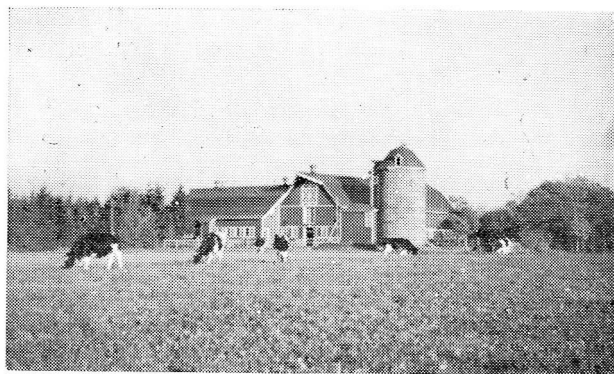


雪印種苗株式會社

花のある牧場

宇都宮さんの渡米土産話から

宇都宮さんといえは牛を飼っている人ならば大抵知っている日本では、有数の乳牛育種家である。札幌の東端、上野幌の原始林の一角に、青い屋根と赤い壁の大きな牛



宇都宮牧場の一部

舎で緑一色の牧草畑の中に美しい風景を画き、その経営については本誌で既に紹介もしたが、過去数年にわたって優秀な乳牛を数多く日本の酪農界に送り出し、乳牛に対する造詣の深さ、経営の見事さは年々多く

の見学者を全国から引きつけているほどである。この宇都宮さんが昨夏新しい種牡牛の血を入れるため約三カ月にわたってアメリカを旅行して帰朝された。弊社上野幌育種場は丁度同氏の牧場の隣にあり、一日多忙な中を暇を作っていたとき種々土産話を伺った。

今度の旅行は牛のための旅行で、私には牛以外のものは興味もなく見て来なかつたと宇都宮さんは前置きされたが、自ら撮影して来られた素晴らしい天然色の幻燈写真につれて、ポツポツ語られる土産話はわれわれの興味をそそるものばかりで話はいつ尽きるとも知れなかつた。数多くの話題の中から、二、三のことをとりあげて御紹介したいと思つた。

今度の旅行は主として北米合衆国の北部及び東北部諸州で、サンフランシスコに上陸後、ユタ、オレゴン、ウィスコンシン、イリノイ等の諸州の著名牧場を廻られた。シヤトルのカーネーション牧場、ウィスコンシンのパブスト牧場、イリノイのカーチスキヤンデー牧場等はその中でも特に有名な牧場である。今回はパブスト牧場から二頭の種牡牛を購入して来たのだが、何れも有名なパークの系統のホルスタイン種牡牛で、一頭は一九五二年の全米乳牛品評会で一等

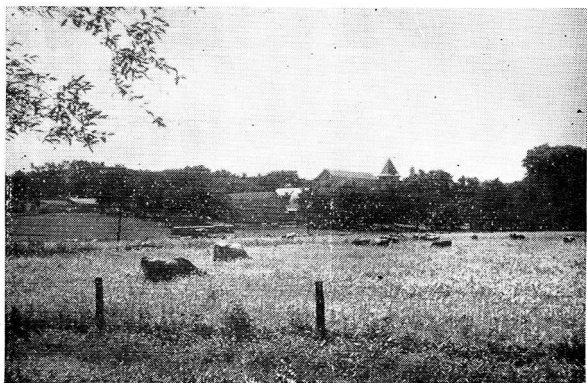
をとつた牛の仔でパブスト・ローマ・ルークといい、もう一頭も同牧場のパブスト・レーバン・ユバーといい、これらの牛が宇都宮さんの手にかかり仕上げられて、今後日本のホルスタインの改良に如何なる優秀な結果を生み出すかはまことに興味あり、また期待に満ちたことである。

あざやかな色彩で美しく写し出される三百枚に近い写真はもろろんほとんど牛と牧場が主体である。しかしまぎれわれれに深い印象をあたえるのは、花にかこまれた画のよ

うな牧場風景、そして羨しいような機械化された施設、そしてまた見るからに伸び伸びとした乳牛の群であつた。

広々とした緑の放牧地に悠々と草を食む乳牛または肉牛の群は如何にも健康である。

大部分の牧場が放牧主体で、夏季は二十時間近くも放牧される。濃厚飼料は日本の三分の一程度しかあたえられぬが、これらの牛は年間産乳量二千五〜三十石は下らぬといわれる。牛乳の生産量も安定しており、しかも牛の病気が全く少く、特に脚のしつかりしていることは羨しいほどだと宇都宮さんは説明される。これは良い粗飼料のお蔭です。日本のよ



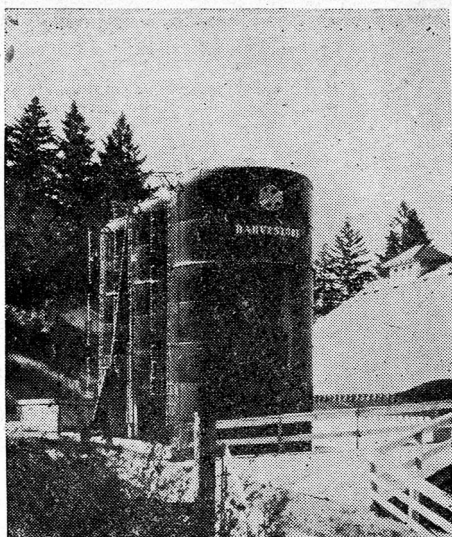
うに濃厚飼料で責めている牛は、なる程乳は出るかも知れないが、不健康で能力が長つづきしない。どこか欠陥ができてくる。放牧により適当な運動と日光浴とそして豊富な粗飼料——牧草があたえられるところに、アメリカの酪農が成立し、発展する基礎があるというのである。

電気牧柵にかこまれた見事な放牧地は、あの乾燥地帯にもかかわらずよく繁茂した草で覆われており、ほとんどの牧草がルーサン(アルファルファ)、ラデノクロバー、ブロームグラスで、宇都宮さんの見て来た地帯ではこれらが過去の赤クロバーやチモシー、オーチャードグラスにかわりつつあるそうである。なる程これらは現在の牧草類中では最も耐旱性つよく、しかも収量栄養分が多いばかりか、多年生で放牧に

耐え、また家畜の嗜好も良好であるから当然というべきであろう。日本の気候風土及び経営条件ではなお考えるべきところはあろうが、これらのことはわれわれも十分検討を加えて見る必要があるうし、特にかかる良い草を豊富に持つていることが見事な牛を作つた原因であることを再認識する必要があると思われる。また放牧草として目

立つたのはスーダングラスで、一年生のその年に間に合う放牧草としてこれが利用され、牛の足がかかれるほどに繁茂している風景が見られた。(寫眞参照) アメリカの種苗雜誌を見ても牧草類中で最近最も宣伝されているのは、ルーサンの新しい系統、ラデノクローバー、スーダングラスは常に目につくものである。

画面は転じてイサノイ州やウイスコンシン州における州の家畜品評会の場面とな



る。持てる国だけあつて何れも極めて盛大で、その施設といい、出陳物といい、われわれの目を奪うものである。まあいえば州のお祭とでもいうか、農業に関するものがすべて同時に出現され、数日にわたつて近辺の農民が集り、楽しみつつ勉強し、また生産物を競うのである。審査前に出品家畜に磨きをかける人々等日本の風景と同じだが、規模の大きさ、華かさ、そして人々の

楽しそうな雰囲気は幻燈を通じてありありと感ぜられる。家畜の中で馬がなく、肉牛が多いのもアメリカらしい事柄である。

農機具も各社が出陳しているのが見られるが、トラクター、コンバインダー等の大農具もわれわれにとつては珍らしいもの、中でも階上へ荷上げのための移動式コンベアー、サイレージを自動的にとり出す機械、牛糞搬出用コンベアー等は特に興味深く、例の搾乳機等とともにアメリカ酪農の機械

化の一面が伺われた。サイロも従来よりも直径に対し高さが高くなり、前記サイレージ自動取出機により窓がなく、ホーロー引きのいわゆる真空サイロが目立つている。(寫眞参照)

緑のローンに紫の蔭をおとす木々の間から、色とりどりの草花にかこまれた赤い屋根の美しい住宅と大きな牛舎が見える。経営面積八十町歩、乳牛四十五頭、鶏七百羽を飼い、しかも親子二人でやつている。これはウ

イスコンシン州の中流農家で、今度宇都宮さんの息子さんが実習に行つてるところである。二人で家畜の飼養管理から畑の作業までやるのだから、日本では想像に絶する。

しかし手のかかる作物はデントコーンぐらいなもの。しかもすべて機械で播種され収穫されるし、大部分が放牧であり、二十頭の搾乳もミルカーで四、五分ぐらいで終るとすれば不可能とは考えられない。

高層ビル、氾濫する自動車、發達した航空網、整備された道路、美しく建ちならぶ住宅等つぎつぎに写し出される幻燈の画は、アメリカの物質文明の現況を遺憾なく示しているが、それらの近代科等の弊が農業界にも残りなく取り入れられ、農作業の合理化、労力の節約、生産の向上のために活用されている。こ

れは唯単にアメリカが天恵にめぐまれたからばかりでなく、彼らのいわゆるパイオニアスピリットの所産であると認めない訳にゆかないようである。

常により良きを求める彼らの情熱が、これらの機械を生み、素晴らしい牧草地を作り、あり余るだけのバターを生産したのである。

シャトルの有名なカーネーション牧場は全く画のような美しさである。傾斜地に自然に生い立つた巨大な米松の森に包まれて、目もさめるような花園にかこまれた、壮大でしかも整然とした牛舎が建ち並び、平坦地は緑一色ルーサンやブロームグラスの放牧採草地である。よく手入れされた入口には同牧場の功績ある牛の大理想像が立つているが、一九三二年の乳量世界記録をもつ牛で、その時の記録が年間産乳量九十三石、脂肪千百ポンドといわれ、この素晴らしいレコードも恐らくこれらの放牧草から生ま

れたものであろう。宇都宮さんの話は尽きなかつたが、同氏の持つて来られた牛から真に日本に適した優秀牛が生まれ、百花繚乱の美しい牧場で悠々草を食むような酪農が一日も早く日本のものとなることを希望しつつこの稿を終りたいと思う。(なかの)

牧草と園藝 三月號 目次

- ◇表紙写真……牧場はうらら……豊かな放牧場風景
- ◇ばらの種類とその特性……明道 博……二
- ◇蔬菜の育苗管理と苗の生育……田村 勉……四
- ◇ビニール育苗の実際……加藤幸作氏談……七
- ◇青刈大豆の栽培利用と新品種の紹介……三浦梧楼……九
- ◇飼料緑肥作物種子特報……三

常に前進

ウイスコンシン、バプスト牧場
よりホルスタイン種牡牛来場

バプスト・ローマ・ルーク

バプスト・レーバン・コパー

宇都宮牧場

札幌市厚別町上野幌